



# 春燈

2016  
July

7  
月号

主宰の句

安立公彦



桜貝白き手窪に彩しづめ

若き日の面差し今にフリージア

読み癖の残る文庫や風薫る

幕間の点茶華やぐ夏の演  
(新橋演舞場東をどり二句)

終幕の口上こそは涼しけれ

成瀬櫻桃子の句

糸編む妻のかなしみ知れど触れず

『風色』昭和四十八年

『風色』では美菜子さんの御病気に拘る苦悩の句を多く詠まれています。その哀しみの深さは奥様も同じはずです。その気持が痛い程解るが故に、敢えて「知れど触れず」と労られています。そこに哀しみの深さが見て取れます。きつとこころで声をかけられたことでしょう。四十一歳の美菜子さんの生涯は、御両親とお兄様の愛に包まれて幸せであったと確信しています。

清水美子

成瀬櫻桃子の句

ストーンヘンジ春の鴉のチャールストーン

「春燈」平成十年

共同通信社への寄稿の冒頭に掲げた句。軽やかなステツプで春を楽しむ鴉たち。そしてこの生命の輝きを、時空を越えた存在感で見守るストーンヘンジ。

「石や岩の声を聴き宇宙の天命を聴き取りおのれの命を悟り得れば、完全な俳人である」の師のお言葉は、後進への確かな指針です。巨石群の前に、師の受けられた啓示の奥深さを感じさせられます。

宮沢治子

# 燈下集



○ 鈴木直充

三陸の湾また湾の日永かな  
風光るいづこの湾も流されて(燈)  
きぎす啼く旅寝の島にめざめけり  
磯馴松そびらに鹿尾菜搔きみたり  
遅き日や隠れ入江にとどく波

○ 高橋和女

春愁の半旗や仏蘭西大使館  
明日逢ふと衣桁に掛けし花衣  
鞍馬路や眼下に見ゆる花の雲  
花影やゆつくり進む車椅子  
今日のごと明日あらばよし風薫る

○ 柴崎甲武信

夢殿の庇伝ひや鳥の恋  
みちのくのゆるがぬ雲居雁帰る  
清明や棚田あふるる水明り  
花林檎常念岳は裾を見せ  
荷風忌や鼻緒のゆるき日和下駄

○ 菊地榮子

ためらはず初夏の詩の国へ行かう  
悲しみも喜びも五月こそ生きぬいて  
黄と白の蝶々を見た私もとびたい  
鳴き足りず春の夜も鳴く鳥のゐて  
名を知らず背の高い五月の人と呼ばう

○ 近藤 牧男  
口漱ぐときは空見て朝桜

水際は風立つところさくらかな

グランドの声の届きしさくらかな

夜桜にさてと机を離れけり

影といふ相棒と春惜しみけり

○ 吉澤 恵美子

父と子の誕生日なり万愚節

花の雲城の残しし角櫓

花筏水の誘惑ありにけり

黒松の不易のいろや緑立つ

行く春や背筋伸ばして杖一本

○ ト部 黎子

惜しまるる別れを重ね花は葉に

手話の手の光のはづむ仏生会

甘茶そそぐ子の手を母の手が支ふ

潮騒の遠き貝塚桜東風

葱坊主夕日を見むと背伸びする

○ 卯木 堯子  
行く春の気儘脱いだり羽織つたり

吊革の高き此の頃啄木忌

恋の文風に綴れり雪柳

連翹の鬢金辺りを祓ひけり

青饅や象牙の箸の持重り

○ 深川 敏子

小説を書く人工頭脳啄木忌

青嵐佳境のページ吹きぬくる

読終へて自問自答や朧月

赤ピーマン青ピーマンや新学期

跳箱を一段上げて進級す

○ 和田 幸江

山裾に夕風出でしさくらかな

四月雛母の生家の広座敷

町の名のふたたび変はるさくらかな

職退きし夫は子猫に甘えらる

花冷の思はずかこふ湯呑かな

○ 大室 恵美子

一言を添へて挨拶初桜

晩学の鞆重たき夕桜

亀の鳴きくれて泣かずにすみにけり

カルチャーの梯子をしたる四月かな

「お手」だけを覚えし仔犬子供の日

○ 尾野 奈津子

忌参りの香煙煽る桜東風

靴音を聞分けてゐる花の夜

一目を置かるる齡残花なほ

武蔵野を分かつ水路や麦青む

生れくる風をとらへて蝶舞へり

○ 小嶋 恵美

家族てふ絆不思議や鳥ぐもり

誰彼の逝つてしまへり花の昼

珈琲豆挽くや春思の一人分

花守の使ひ古りたる箒かな

花冷や行き交ふ船のうすあかり

○ 三宅 文子

惜春の雨透きとほる中有かな

さくらさくらあの世覗いて来し色に

すぐそこに亡き人の居る夜のさくら

ことぶれのやうに風来るさくらかな

夕ざくらあかりの外のふたりかな

○ 太田 慶子

咲満ちてさくら深閑たる真昼

しだれざくら毀誉褒貶の鴉かな

天よりの母の言伝て桜咲く

円墳のほのかにいびつ鳥の恋

遠足や地球の丸く見ゆる丘

○ 青柳 雅子

九時間に及ぶ手術や冴返る(長女手術)

退院のうれしき桜吹雪かな

段葛春らんまんの通り初め(改修まで)

鎌倉の五山けぶらす花の雨

わが町のハザードマップ春寒し

# 当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

遠富士に雲の羽衣仏生会

いとけなく甘茶の海の童仏

白藤の房短しや子の香り

花過ぎて葉桜多く語りだす

春草千里悲しみの果て無かりけり

○ 石橋邦子

はつ夏の雲のゆきかふ傘雨の忌

みどり児の笑みの楽しき端午かな

えご散るやひねもすとどく水の音

家々を写す水田の水あかり

海舟の墓域をかこむ著莪の花

○ 吉村さよ子

手をつなぐ木の間の夫婦春夕焼

かたまりて呆くる土筆に日のやさし

切株の水気脱けゆく春暑し

声にして山なみ親し春惜しむ

さきだちの法螺貝ひびく夏近し

○ 大森道生

研ぎし鎌手に切れ味を草刈女

何方なく香る山路や朴散華

緋目高の透きてはかなき臍腑かな

唐破風の風呂屋に母娘夕薄暑

初夏の光まぶしき朝かな

○ 佐藤博重

入学の肩をはみ出すランドセル

あけぼのの山気下りくる桜かな

手をつなぐ母子に桜明りかな

アンドロメダ星雲と化す花筏

雨粒を弾く牡丹の蕾かな



# 春燈の句

安立 公彦選



塗り替ふる丹の橋の艶花の雨

埼玉 中里よし子

仰向けにはた俯せに落椿

全身もて泣く幼子や春の昼  
ひと文字の墨の濃淡春愁

持ちつもたれつ二世帯暮しさくら咲く

隠沼の水ひとり占む青蛙

神奈川 葦原 霞切

甲斐路朱夏富士の湧水家苞に

天城嶺は今日も雨雲卯波寄す

下総や渡し待つ間の青しぐれ

東京 中澤 弘

ささくれをむしる放心傘雨の忌

飛跳ねる鯛の向かうに皐月富士  
それぞれに行く方あるや蝸蚪育つ

穀象の食ふ米なれば塩にぎり

春寒や草に隠るる道祖神

兵庫 古川 幸子

柿若葉昨夜のしづくをオパールに

雨上りの御陵の堤春菜摘む

黄金週間習ひに急ぐ親子かな

千葉 大湊 栄子

初夏や目覚め緩りと朝の影

ポケットの電話鳴り出す春の闇

薫風にそよぐ野花のいとしさよ

海光のとどく坂道ミモザ咲く

兵庫 秋山 薫

ひと日終へ帰る巷の薄暑かな

古道の勿忘草に風そそと

春の浜近くに見ゆる島幾つ

東京 佐藤まさ子

雑草の育ち過ぎたる穀雨かな

なまぬるき風の呼ぶ雨春深し  
裏山の蓬々として春深し

# 余言

安立公彦

等分の愛なら要らぬ鬘草

片桐てい女

同時発表の句に、「戦前戦後丸々生きて昭和の日」という句がある。四月二九日、昭和天皇の誕生日に当たるとこの日を、それまでの「みどりの日」から改称された祝日。作者はこの句の通り戦前戦後をすべて己が人生として体験された。まさに激動の時期である。「丸々生きて」に、充実の人生を誇る思いが、若干の諧謔をこめて詠まれている。掲出句について、「愛」とは何か、という序章に立ち止まる。博愛、恋愛、寵愛、敬愛、しかしこの句にはそういう粹はない。要するに「愛」である。その「愛」を、他者と相等しい「愛」など要らない、という強い心情が支えているのだ。これこそまことの「愛」である、対象は違えわが身に受ける愛はそうでなくては虚構となる。座五の、「鬘草」は路傍によく見る草。しかし顧みられることの無い草と言えよう。こういう草はこの句に用いられてこそ、生きる季語として存在感を示すものである。

穏やかに暮れゆくひと日しじみ汁 井上 春子

「しじみ汁」が何とも言えず佳い。しかも「穏やかに暮れゆくひと日」である。この句を読んでいると、読み手もこの句の日常にいつしか同化されてゆく思いがする。近頃こういう飾り気のないやすらかな生活詠を余り見なくなつた。この生活がこの後も作者に添うことを祈念する。

忍冬の花を咲かせて人棲ます 中野あぐり

「忍冬の花」は、にんどうの花、にんどうの花、すひかづらの花、それぞれに読まれる。蔓性の低木。「忍冬」の字は、茎の先端の葉が冬も落葉しないで残ることから来ていると、「野田坂造園樹木事典」は記す。

この句「忍冬の花を咲かせている邸が無人である」という。近頃こういう家があちこちで話題になっている。古くから続いた邸宅の有り様が思い浮かぶ。整った時事俳句だ。

落款の朱のくつきりと風薫る 諸戸せつ子

「朱」とあるのは自筆の書画に捺す印であらう。墨痕淋漓、或いは流暢な筆跡の色紙を思い出す。書体というものは、千の書き手に千の書き様がある。

その筆跡に朱肉の色が映える。「くつきりと」がその場の景を良く表わしている。折からの薫風が心地よい。

みちのくのゆるがぬ雲居雁帰る

柴崎甲武信

「雲居」は「空」。「雲居路」という、鳥などの通る雲中の路を指す言葉もある。そのはるかな空を、いま雁が帰ってゆく。春になると北方に帰る鳥の中でも、帰雁はことに哀れ深いものとして、古来和歌に詠まれて来た。

今この句を見ていると、五年前の東日本大震災が思い出されてくる。復興は着々と進んでいる。それは「ゆるがぬ雲居」に読みとれる。同時に句では触れていないが、今回の「熊本地震」が胸を締め付ける。今はただ一日も早い復旧を願うばかりだ。情・景とも整った作品である。

紺青の潮目はるかに若布干す

江草 礼

南房総の海辺に行くと、若布を干してある景をよく見かける。旅びとの目には、何とものんびりとした風景だ。

この句、表現する文字をよく吟味して使っている。まず「紺青」がいい。あざやかな藍色、海原の広やかさが読みとれる。「潮目はるかに」が紺青を受けて、岸辺の岩礁を具象化する。「若布干す」の前には、「若布刈る」という作業がある。そういうことなども思い起こす句である。

あたたかや駅交番の大張子 岩永はるみ

去る二月七日、俳人協会栃木支部賀詞交換俳句大会が、宇都宮市のホテル丸治で開催された。一人二句、全三二六句の句稿が送られて来たのは一月中旬だった。その中から特選三句、入選一七句を選び、折返し送付する。もとよりの結社の人が入選しているのかなど、当日でないと分からない。結果二〇名の内、春燈作家を五名選んでいた。その特選一位が掲出の句だった。他の四句は、特選三位の東原節子、入選の上山永晃、酒井宏子、小倉陶女の三氏。現在の俳壇では、結社による作風の違いは、往年のように際立っていない。それは以前のような出色の俳人が居ないということでもあろう。しかし今回の私の選の偏りは、春燈作家という作品の有り様から来ているのだろう。

この句、駅前交番と、犬張子という全く別種のもの、「あたたかや」をクッションとして、絶妙につり合っている。街の人たちに信頼され親しまれている交番の景がよく表現されている句だ。この大会に、副支部長の上山永晃さんは車椅子で参加、ホテルに部屋をとりご子息二人が同行されたが、大会八日後に逝かれた。無念の上もない。

幹事役として尽力された木多芙美子さん達に、この場を借りて大会の成功を祝い、併せて感謝の思いを呈します。